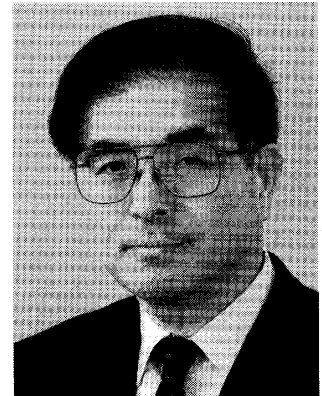


会長退任に当たって

中央大学 教授 今野 浩



2年の任期を終え、4月に退任いたしました。何とか無事に任期を全う出来たのは、強力な3人の副会長と有能で行動力のある理事諸氏、そして信頼すべき事務局スタッフの御協力のおかげと深く感謝している次第です。

書くべきことは「OR 40年」で書き尽くしましたので、ここでは学会創立50周年に向けた企画の1つを御紹介して、皆様の御理解と御協力を賜りたいと思います。

オペレーションズ・リサーチは、1950年代から60年代にかけて、線形計画法、非線形計画法、整数計画法、ネットワーク・フロー理論、動的計画法、ゲーム理論、待ち行列理論、在庫管理理論、信頼性理論などを矢継ぎ早に生み出し、極めて早い段階で経営科学、システム工学の根幹をなすものという位置づけを獲得しました。

しかし70年代に入ると、ORは実務家たちから様々な批判を受けることになりました。曰く、理論(数学)中心で実際問題の解決には役に立たない。定形的な問題を解くことは上手だが、非定形的な問題には無力だ、等々。

確かにこの時代、ORは大きな曲がり角に立っていました。様々なモデルとアルゴリズムは用意されたものの、現実的問題の解決に不可欠なデータ収集能力、計算能力、そしてソフトウェアが十分に整備されていなかったからです。

しかし90年代に入って状況は一変しました。モデリングやアルゴリズムにおけるブレーク・スルーと歩調を合わせて、計算能力の飛躍的向上、巨大なデータベースの整備、そして様々な優れた

ソフトウェアが出現したからです。この結果、20年前には1年以上かかっていた問題が数秒で解けるようになり、生産現場や流通過程における驚異的効率化が現実のものとなりました。ORの創始者たちが構想した夢が、50年目にして実現したのです。

因みに、ヨーロッパに本拠を置くコンサルティング会社ARCは、21世紀を「最適化の時代」と呼び、ORをもってこれを実現するためのエンジンと位置づけています。またアメリカ産業競争力委員会が2004年に発表したパルミサーノ・レポートは、21世紀を切り拓く「サービス科学」の担い手として、ORに大きな期待を寄せています。

OR学会は、これらの期待に応えるべく様々な活動を行っていますが、このようなことを知っているのは一握りの専門家たちだけで、世間では依然として20年前の批判を口にする人もいます。そこでこのような状況を打破するため、50周年事業の1つとして、(広い意味での)ORの研究・教育・普及に傑出した業績を挙げた個人(またはグループ)を表彰するための新たな賞、「近藤賞」を創設することに致しました。

本学会の創設者の1人であり、OR学会会長、日本学術会議会長を務め、2003年度に文化勲章を受賞した近藤次郎先生が満90才を迎えられるのを機会に、この賞を設立することによって、OR学会の活動を一層活性化すると共に、ORの社会的知名度を飛躍的に高めたいと考えている次第です。学会員諸氏の御支援と御協力をお願いする次第です。